なぜ英語が話せないの

〈70〉

会話上達法第三部

やさしい動詞を活用

むずかしい単語は必要ない

英国の言語学者・チャールズ・オグデンは、日常会話に最もよく出てくる基礎単語八百五十語を定めた。このうち動詞は十八語。これを大学教育を受けた英米人がもつ動詞の語い力（四千―一万）と比較すると、問題にならないほど少ない。だが、基本動詞の特徴は、多くの前置詞と結合し、広く多様な意味をもつことである。

英米人と話すと、日常わかりやすい単語（little words）を用い、難しい単語（big words）を避けるのに気づく。特に動詞は平易な単語を使う。語いの量がそう多くない日本人が、やたらbig words を連発し、英米人に奇異な感じを抱かせるケースも目立つ。

久留米市東町で「実践英語セミナー」を開く戸田昭二学院長（五三）は「基本動詞の中からmayとwillを除いた十六語を、結合前置詞を含めて暗記すれば、会話力は飛躍的に向上する」と指摘する。

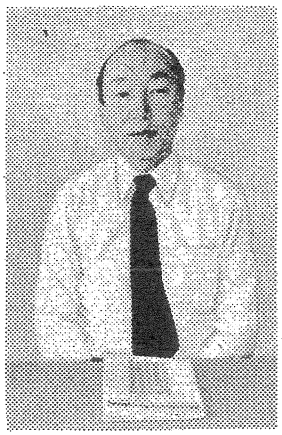
例えばget。「He gets on my nerves. I want to get him out of here」（彼の存在は神経にさわる。出て行ってくれたらなあ）「彼女の話に心打たれた。彼女に同情するよ」なら「Her story got me, and I got(am) sympathetic with her」となる。「君は僕を誤解している」「オレをそんなふうに受けとらないでくれ」は「You've got me wrong. Don't get me that way」

さらに「Let's go」（壊す）「He went through a lot」（経験豊か）など。

「make」にもいろいろある。「I rushed to the station, and made it」（間に合った）。受験生に「I hope you'll make it」と言えば「合格祈るよ」になり「make a dent」は「立ち寄る」「He is still running around with Jane」（付き合う）「She is run down from overwork」（過労で倒れる）。

runも多彩な意味をもつ。「He runs to his parents with a problem」（何から何まで両親に頼る）「I will run over to see you after dinner」は「立ち寄る」「He is still running around with Jane」（付き合う）「She is run down from overwork」（過労で倒れる）。

やさしい動詞を活用すれば、むずかしい動詞はほとんど必要ない――戸田先生はこう話している。



平易な動詞を活用すれば十分と語る戸田先生